

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第941号 平成27年6月4日

スマホはやめられるか

信州大学の山沢学長が、4月4日に開かれた入学式において、8学部2000人の新入生学生を前に「スマホやめますか、それとも信大生やめますか」と語りかけた一件は、「スマホは悪いものと決め付けるのはおかしい」、「学長のいわんとするところは理解出来る」等、賛否様々な議論を呼び起こしました。

朝日新聞は4月8日付の紙面に「スマホやめますか、それとも信大生やめますか」という見出しを付けていますが、その位このフレーズはインパクトがあったという事です。

ただ、このフレーズだけで山沢学長の挨拶について論評する事は適当ではありませんので、まず、山沢学長の挨拶文の全体を見て置きたいと思います。

(前略)

今までは、皆様は正解のある問題を解くことに終始していました。知識の量を試されてきました。世の中では、正解のない問題を解かなければなりません。誰も考えたことのないことを考えるという、知識の質を問われることとなります。さらに、世界の状況は変化が大きく、スピードも速く、ICTの進歩で一気にグローバル化します。

日本が今後とも活力ある社会を維持し、世界へ積極的に貢献していくためには、科学、技術、文化のいずれの分野でも独創性や個性を発揮することが重要となります。横並びの発想では問題を解決できません。

皆様は、もしかしたら、個性の発掘に没頭する「自分探し」をしませんでしたか。また、これからしようと思っていないですね。若い時の自分探しは勧められません。特に、解剖学者の養老孟司さんは、「個性は徹底的に真似をすることから生まれる」とまでおっしゃられています。伝統芸能の世界に見られる、師匠と弟子の個性の違いを指摘されてのことです。

個性を発揮するとは、なにか特別なことをするのではなく、問題や課題に対して、常に「自分で考えること」を習慣づける、決して「考えること」から逃げないことです。自分で考えると他人と違う考えになることが多くなり、個性が出てきます、豊かで創造的な発想となります。

学生で言うと、普段の勉強を真剣に取り組むこと、そして身につける「知識の量」

を主とするのではなく、「知識の質」すなわち自ら探求的に考える能力を育てることが大切となります。

その上で、山沢学長は「信州大学の学生は独創性が豊かなのだろうか」と問い掛けて、昨年6月に日本経済新聞が行った「大学のイメージ」ランキング調査の結果を引き合いに出しながら、次のように挨拶を続けます。

信州大学は、京都大学を抑えて、「独創性」項目で第一位です。(中略)

就職されている先輩諸氏は、「独創性」が高いという社会的評価です。皆様もそうでしょうか。卒業すると、そうなるのでしょうか。私は違うと思います。受験勉強と同じ気持ちでは駄目です。大学での勉強と生活の仕方を変えなければなりません。

その理由をお話しましょう。創造性を育てるうえで、特に、心がけなければならないことは、時間的、心理的な「ゆとり」を持つこと、ものごとにとらわれ過ぎないこと、豊か過ぎないこと、飽食でないことなどが挙げられます。

自らで考えることにじっくり時間をかけること、そして時間的にも心理的にもゆったりとすることが最も大切となります。(中略)

信州大学では、自然に囲まれた緑豊かなキャンパスでの勉学と課外活動、都会の喧騒とは無縁の落ち着いた生活空間、モノやサービスなどが溢れることのない地に足の着いた社会など、知的にものごとを考え、創造的な思考を育てる環境を簡単に手に入れることができます。先輩諸氏は、このようにして、ゆっくりとした時間の流れを作っていたのです。

皆様はどうでしょうか。残念なことですが、昨今、この信州でもモノやサービスが溢れ始めました。その代表例は、携帯電話です。アニメやゲームなどいくらでも無為に時間を潰せる機会が増えています。スマホ依存症は知性、個性、独創性にとって毒以外の何物でもありません。スマホの「見慣れた世界」にいと、脳の取り込み情報は低下し、時間が速く過ぎ去ってしまいます。

「スマホやめますか、それとも信大生やめますか」 スイッチを切って、本を読みましょう。友達と話をしましょう。そして、自分で考えることを習慣づけましょう。自分の持つ知識を総動員して、ものごとを根本から考え、全力で行動することが、独創性豊かな信大生を育てます。

(以下略)

山沢学長の挨拶では「スマホやめますか」というところがクローズアップされてしまい、学長が本当に伝えたかった思いが伝わらなかったとすれば、非常に残念な気がします。

スマホについては、今や学生達にとってはコミュニケーションや情報収集にとって必須のアイテムとなっています。また、大学自体も学生に対して休講情報や教室

の変更等をアプリ上で通知するといったように、学生がスマホをやめると大学にとっても支障が生じかねない状況となっています。

しかし、その一方で、スマホ依存症が蔓延しつつある現状は非常に深刻であり、苦言を呈したくなる山沢学長の気持ちは、良く理解出来ます。

「スマホやめますか」という発言が余りに直裁であるために、科学技術の進歩を否定するものだという批判の声が出て来るのも致し方ありませんが、学長が本当に述べたかった事は、スマホのスイッチを切って本を読み、友達と話し、自分で考える習慣を付け、物事を根本から考えて全力で行動する学生であって欲しいという事だと思います。

信州大学には、知的にものごとを考え、創造的な思考を育てる環境が整っているが、そこに身を置いたからといって独創性豊かな人間になれる訳ではないというのは当然です。

「スマホやめますか」という問い掛けは、スマホをやめれば良いという単純な話ではない筈です。あくまでも、信州大学の学生として「自分の時間を最大有効に活用し、学び続ける覚悟があるのか」という問い掛けだったのではないかと私には思えます。

いずれにせよ、スマホはその使い方が重要で、「スマホは使ってもスマホに使われる事のないように」というのは、今更いうまでもありません。

なお、山沢学長は、自分の時間を有効に使うための5つの方策を示していますので、参考までに紹介しておきましょう。

- 1 学び続けること。新しい経験が得られて、時間感覚がゆっくりとなる。
- 2 新しい場所を訪ねる。定期的に新しい環境に脳をさらす。
- 3 新しい人に会う。他人とのコミュニケーションは脳を刺激する。
- 4 新しいことを始める。新しい活動への挑戦。
- 5 感動を多くする。